

ネイチャーセンター ガイド (97)

「コミュニケーションしていく」ということについて考えてみたいと思います。

以前も考えるということについてお話してきました。人は考える生き物、考えることを楽しめる生き物であると思うのです。コミュニケーションを図っていくためには、考えていくことが必要です。本能の赴くままに動いていたのでは、「わがまま」「一人よがり」に発展していくことは目に見えて分かるでしょう。

最近では、この「わがまま」「一人よがり」になる傾向が強くなっているように思えてなりません。そしてその「わがまま」を他人に転嫁することを平気で態度に示す、言葉で表すことが普通になっているのです。これは表現する感覚の麻痺です。この状態が継続されれば普通感覚の麻痺を通り越し、非常に残念な結果となって「子どもたち」に現れていくのです。このような社会風潮を作り上げた大人たちの責任です。誰の責任でもありません。一人ひとりの責任です。私たち大人は何をしなければならないのでしょうか。これを考えるのです。それもみんなで・・・。「わたしは考えられないから・・・」ではなく、分からない方も考えることを楽しむのです。そしてみんなが考えたとき、子どもたちは変わるでしょう。

「大人が変われば、子どもが変わる」というフレーズをよく聞きますが、どうすれば変わるのか？この意味がうまく説明されず、分からない方々の胸に届いていないのです。標語として留まっているように思えてなりません。「変わる」

ということは、一人ひとりの気持ちを変えることです。とても容易なことではありません。森づくりよりも大変なのかもしれないと考えるようになりました。

「変わる」前に「変える」作業がまっています。これは人のプライドを傷つける可能性を高くもっています。変える側も相当な能力と労力が必要とされるでしょう。しかし、変えるという信念とゆるぎない自信、自分を顧みる心、思いやる心、一生お付き合いする気持ちがあれば誰にでも出来ると思うのです。

「ノウハウ」は、人から教わるものでなく、「子どもの頃からの他者とのお付き合いの仕方」で身に付くものだ、と最近分かってきました。本を読んでの実践は知識としてあっても心がありません。小さい頃からの異年齢とのお付き合いが、「ノウハウ」を身に付けさせるのです。身に付くということは「学ぶ」ということではなく「自然に体と心に培う」ということなのです。

核家族化が進む昨今、異年齢とふれ合う機会や場面が創出されているようですが、本当に子どもの心に気付き、心を築くためには生活の中で異年齢と接していくべきなのです。単なるイベントでは絶対に身に付かないものなのです。

人は心ある生き物、その心を育む状況は日常にあります。状況を理解し、把握し、みんなでその情報を共有し、「目標」を立てる。そして「先を見つめる心」を養っていく。心の改革に終りはないのだ。

連絡・問合せ先 ☎(45)6222

宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター
開館時間：午前9時から午後4時まで
休館日：月曜日、祝祭日の翌日

防災ミニ情報

災害とは、「暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波、噴火、その他の異常な自然現象又は大規模な火事もしくは爆発その他その及ぼす被害」と災害対策基本法に定義されており、人間の社会生活や人命の受ける被害が大きい場合に大規模災害と呼ばれます。

都留市は、周囲を千メートル級の峰々に囲まれ、急傾斜地が多く、地震、暴風、豪雨、地滑りなど極めて多種の自然災害が発生しやすい自然環境になっているため、自然災害には充分注意しなければなりません。

また、近年の社会・産業構造の多様化に伴い、大規模災害の発生についても、その危険性が指摘されています。

災害の軽減には、恒久的な災害対策と災害時の効果的対応が重要でありますが、これらは一朝一夕に成せるものではなく、国、県、公共機関、市民それぞれが防災に向けて積極的かつ計画的な行動と相互協力の地道な積み重ねにより達成するものです。

そこで、「自助・共助・公助」を原則として、災害対応力を高め、連携することにより被害を最小限に抑えていくことが必要です。

「災害を防ぐことはできませんが被害を最小限に抑える。」という意識で迫り来る災害に立ち向かっていきましょう。

次号から、最も身近に起こりえる東海地震についての詳細を連載します。